

# 小学第5学年の自己概念とジェンダー・アイデンティティに関連した実態調査：「命の授業」前後の比較から

著者	加藤 千恵子, 高岡 哲子, 鹿野 友恵, 小田 明美
雑誌名	紀要
巻	4
ページ	17-25
発行年	2010-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1088/00000040/">http://id.nii.ac.jp/1088/00000040/</a>

〈論文〉

## 小学第5学年の自己概念とジェンダー・アイデンティティに 関連した実態調査

－「命の授業」前後の比較から－

加藤千恵子<sup>1)</sup>、高岡 哲子<sup>1)</sup>、鹿野 友恵<sup>2)</sup>、小田 明美<sup>2)</sup>

An investigation of actual conditions concerning the self-concept and gender  
identity of fifth graders in elementary school

－ A comparison study before and after taking two "Classes for Thinking about Life" －

Chieko KATO, Tetuko TAKAOKA, Tomoe KANO, Akemi ODA

1) 名寄市立大学保健福祉学部看護学科、2) 名寄市立名寄東小学校

The objective of this study is to clarify the self-concept and gender identity of fifth grade students in elementary school. The subjects were 37 fifth grade students (male: 21, female: 16) who took two 45-minute classes for thinking about life. Data were collected by using questionnaires distributed before and after the classes. The contents of the questionnaires was composed of originally created items concerning self-concept and gender identity.

The results indicated that the girls ranked the following 2 items, collected before the classes, significantly higher than the boys: "The opposite sex is happier." and "I have someone who listens to my concerns" Three further items - "I want a baby in the future", "I have someone who notices when I feel down." and "I have someone who accepts me as I am" were ranked higher by girls after completion of the classes. Additionally, boys ranked the item "I was lucky to be born the sex I am" significantly higher than girls. In short, it became clear that the gender gap was wider after the classes. Therefore, it was suggested that differences in recognition of one's own gender become clearer by attending the classes.

本研究では、小学第5学年37名を対象に命の授業を行い、独自に作成した自己概念とジェンダー・アイデンティティに関連した質問紙を用いて、授業の前後における変化と男女別の特徴について調査した。その結果、授業前は「違う性別の方が幸せだ」「不満があると聞いてくれる人がいる」という2項目に性差が見られ、授業後は授業前の項目に加えて「この性別に生まれて良かった」、「将来赤ちゃんが欲しい」、「元気がないと気づいてくれる人がいる」、「私の存在を認めてくれる人がいる」の6項目に増えた。男女別の詳細を見ると、男子は女子に比べ有意に「この性別に生まれて良かった」とする割合が高く、自己の性別に関して肯定的であるという特徴があった。一方、女子は男子に比べ有意に「違う性別の方が幸せだ」、「将来赤ちゃんが欲しい」、「不満があると聞いてくれる人がいる」、「元気がないと気づいてくれる人がいる」、「私の存在を認めてくれる人がいる」とする割合が高く、母性意識の目覚めや周囲のサポートや尊重してくれる存在に気づくという特徴があった。すなわち、性別によって自己の性に関する認識の違いが明確になっていくことが示唆された。

キーワード；小学第5学年、自己概念、ジェンダー・アイデンティティ、ジェンダー・スキーマ、命の授業

## I. はじめに

助産師等の医療専門職者の活動は、施設内や地域で様々な広がりを見せている。近年、助産師による命の教育が取り上げられ、活発な活動が見られる。小・中・高の学校では、医師、助産師、養護教諭による教育や体育の担当教諭もしくは担任による保健体育等の教科を通じた教育と道徳教育をへて、個人々の成長発達に伴う「性＝生」を自己構築するよう系統立てた連携が行われている学校もある。安河内ら<sup>1)</sup>は、小学校36校を対象に性教育の主な担当者と内容について調査しているが、「主に取り組んでいるのは養護教諭であり、「命の大切さを教える」「性について正確な知識を身につける」ことを目的に授業科目として実施し、学年の進級とともに外部講師による特別活動が増加していたことを報告している。つまり、命の授業における助産師を含む医療従事者の役割は大きい。また、小中学校等、生命や性に関心を持ち始める思春期から命に関する知識を得ることは、成長発達を円滑にするものと考えられる。

今回、小学校の理科授業の外部講師として命のはじまりの単元を担当し、授業を行った。この授業により、児童がどのようなニーズをもち、授業担当者にどのような役割を求められているのかを前後の質問紙調査から明らかにするとともに、児童が今回の授業からどのような影響を受け、変化したのか、授業を行ったクラスのカラーや考え方がどのような傾向にあったのかの特徴を明らかにしたいと考えた。これにより専門職者である助産師が小・中学校の授業に関わる意義が明らかになるものと考えられる。よって本研究では命の授業を受けた小学第5学年の授業前後の変化を明らかにし、今後の小学生に対する道徳や理科の授業に活用する基礎資料とすることを目的として検討を行った。

## II. 研究方法

### 1. 小学第5学年理科授業の概要

小学5学年理科（生物とその環境）では、植物の発芽及び成長の様子を調べたり、小動物の観察を通して「生物は増えること」「子は決まった発育を通して親になること」「生物は、色々な構造を持っていること」などに気づかせている。そして児童たちが生命を尊重し健康で安全な生活を行えることを目指して指導されている。このうち研究者が担当したのは、2009年7月の2コマを活用して行われた「テーマ：命の始まり」の授業であった。

授業の内容は、1) 命のバトンを受け継いだ、身体的、精神的、社会的存在であること。2) 自分の生まれてきた経過を知り、妊娠経過に伴う胎児の成長発達と赤ちゃんについて知ること。3) 思春期の身体的変化、心理的变化を知り、思春期の導入を円滑なものとする以上の3点であった。

### 2. 用語の定義

- 1) ジェンダー・アイデンティティ<sup>2)</sup>：自己の生物学的性（sex）を受容した上で作られる自分らしさ・自我アイデンティティである。
- 2) ジェンダー・スキーマ<sup>3)</sup>：ジェンダーに基づいて情報処理をするための個人の認知的枠組みで、どこに注目し、どう記憶し、どう再生するかを認知活動を方向付ける。
- 3) ジェンダー・ステレオタイプ<sup>4)</sup>：男性と女性について人々が共有する構造化された思い込み（信念）のこと。

### 3. 対象

対象は、命の授業に参加した小学第5学年37名（男子21名、女子16名）であった。

### 4. 調査期間

調査期間は、2009年7月であった。

### 5. 調査内容とデータ収集方法

調査は、性別、自己概念とジェンダー・アイデンティティ<sup>5)</sup>に関する20項目（以下20項目）からなる独自に作成した質問紙を用いて、授業前後に行った。

#### 1) 質問項目

- (1) ジェンダー・アイデンティティに関する項目としては、①「この性別に生まれてよかった」

②「違う性別のほうが幸せだ」③「性別のくせにといわれる」④「将来赤ちゃんがほしい」である。(2) 自己概念に関する項目としては、①「自分を良く知っている」②「自分をコントロールする方法を知っている」③「短気」と「気長」④「強い」と「弱い」⑤「陽気な」と「陰気な」⑥「真面目な」と「不真面目な」⑦「にぎやかな」と「静かな」⑧「素直な」と「強情な」⑨「大人っぽい」と「子どもっぽい」⑩「不潔な」と「清潔な」である。(3) 社会性の項目としては、①「相手の考えをよく察する」②「元気がないと気づいてくれる人がいる」③「不満があるとき、聞いてくれる人がいる」④「存在を認めてくれる人がいる」⑤「無口な」と「社交的な」⑥「暖かい」と「冷たい」である。

以上の20項目において、(1)の①～④と(2)の①、②および(3)の①～④は「まったく当てはまらない」「どちらかといえば当てはまらない」「どちらかといえば当てはまる」「とてもよく当てはまる」の4件法のリカート法で回答を求め、(2)の③～⑩と(3)の⑤、⑥は「とてもそう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「ややそう思う」「とてもそう思う」の5段階で相反する気質に自分はどの程度当てはまるのか該当するところにそれぞれ○をつけてもらった。

## 6. 分析方法

分析方法は、統計ソフトSPSS17.0を使用し、男女別と授業の前後で各項目をクロス集計し、順位尺度項目はMann-WhitneyのU検定を行った。自由記述の項目は質的に分析した。

## 7. 倫理的配慮

対象者には、質問紙の説明は担任教師が行い、回収した。

質問紙の回答は無記名とし、個人が特定できないこと、途中でやめられること、成績には関係しないこと、研究の目的以外には使用しないことを文書と口頭で説明し、同意を得た。本研究はA小学校管理部門の承諾を得て行い、名寄市立大学倫理委員会の承認を得た。

## Ⅲ. 結果

### 1. 自己概念とジェンダー・アイデンティティの項目

男女別では、授業前の20項目において、「違う性別の方が幸せだ」( $p = 0.001$ )、「不満があると聞いてくれる人がいる」( $p = 0.041$ )の2項目で有意な差が認められた。授業後の20項目においては、「この性別に生まれて良かった」( $p = 0.013$ )、「違う性別の方が幸せだ」( $p = 0.012$ )、「将来赤ちゃんが欲しい」( $p = 0.001$ )、「不満があると聞いてくれる人がいる」( $p = 0.007$ )、「元気がないと気づいてくれる人がいる」( $p = 0.034$ )、「私の存在を認めてくれる人がいる」( $p = 0.036$ )の6項目において有意な差が認められた。以下に6項目の詳細を示す。

図1は、授業前後の「この性別に生まれて良かった」の項目における男女別選択数を示したものである。授業後「とてもよく当てはまる」とするものが男子18名(85.7%)、女子8名(50.0%)であり、男子は女子に比べ有意に「この性別に生まれて良かった」とする割合が高かった( $p = 0.013$ )。

図2は、授業前後の「違う性別の方が幸せだ」の項目における男女別選択数を示したものである。授業前「全く当てはまらない」とするものが男子17名(80.9%)、女子5名(3.1%)、授業後「全く当てはまらない」とするものが男子18名(90.0%)、女子9名(56.3%)であり、男子は女子に比べ有意に「違う性別の方が幸せだ」に否定的である割合が高かった(授業前 $p = 0.001$ 、授業後 $p = 0.012$ )。

図3は、授業前後の「将来赤ちゃんが欲しい」の項目における男女選択数を示したものである。授業後「とてもよく当てはまる」とするものが男子3名(15.0%)、女子11名(68.8%)であり、女子は男子に比べ有意に「将来赤ちゃんが欲しい」とする割合が高かった( $p = 0.001$ )。

図4は、授業前後の「不満があると聞いてくれる人がいる」の項目における男女別選択数を示したものである。授業前「とてもよく当てはまる」とするものが男子3名(14.3%)、女子9名(56.3%)、授業後「とてもよく当てはまる」とするものが男子4名(20.0%)、女子11名(68.8%)であり、女子は男子に比べ有意に「不満があると聞いてくれる人がいる」という割合が高かった(授業前 $p = 0.041$ 、授業後 $p = 0.007$ )。

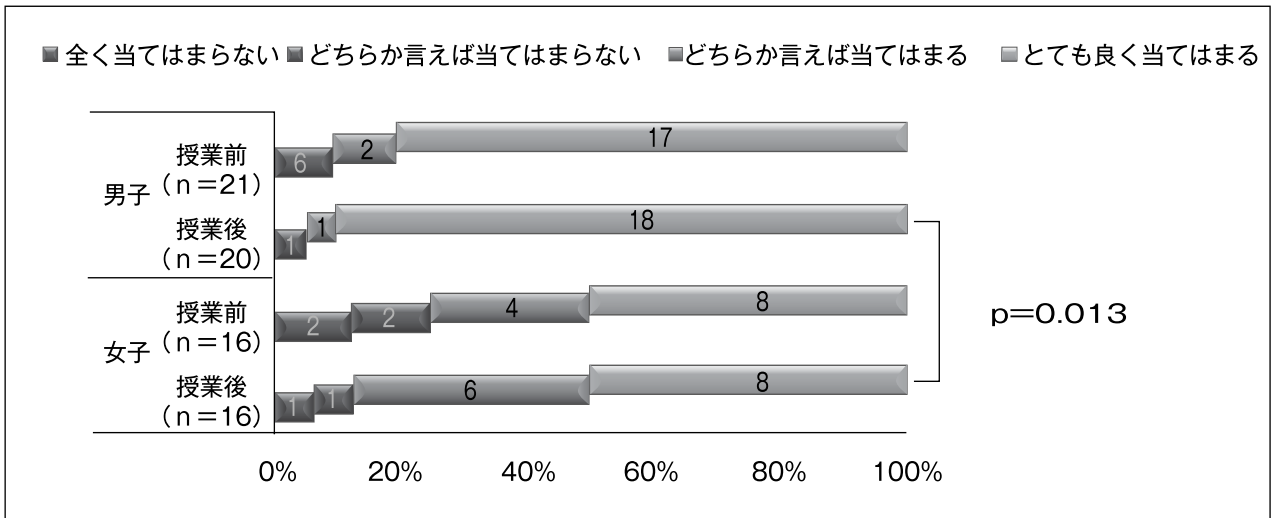


図 1 「この性別に生まれて良かった」

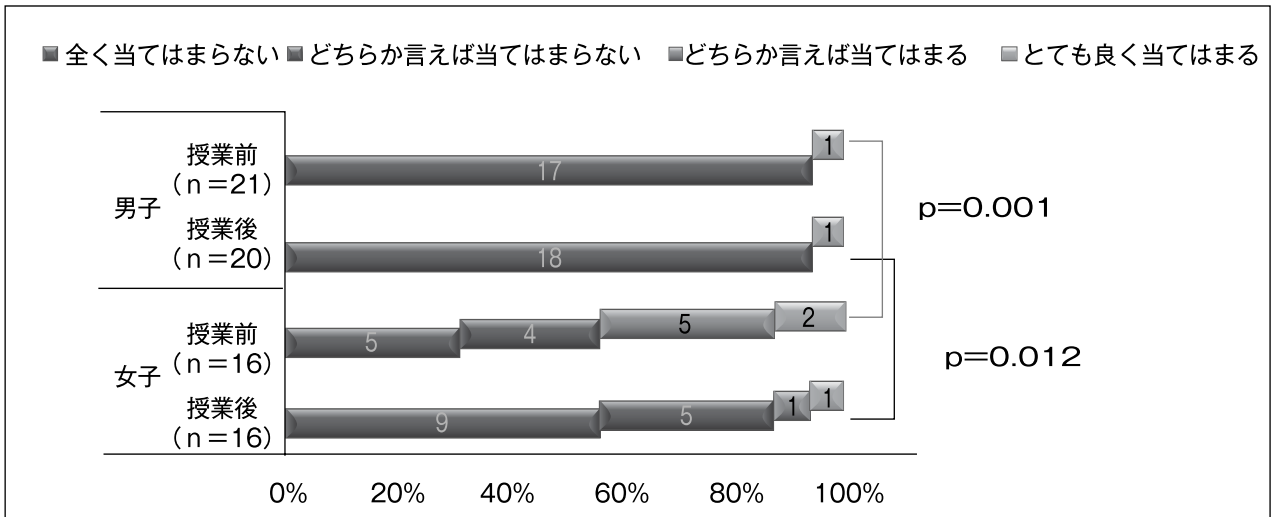


図 2 「違う性別の方が幸せだ」

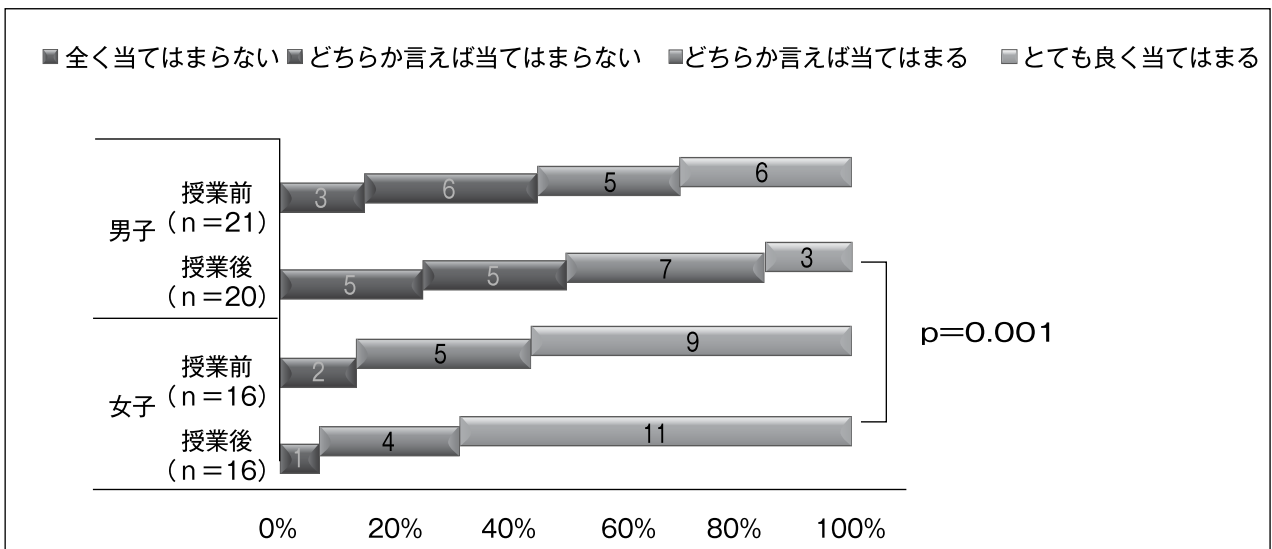


図 3 「将来赤ちゃんが欲しい」

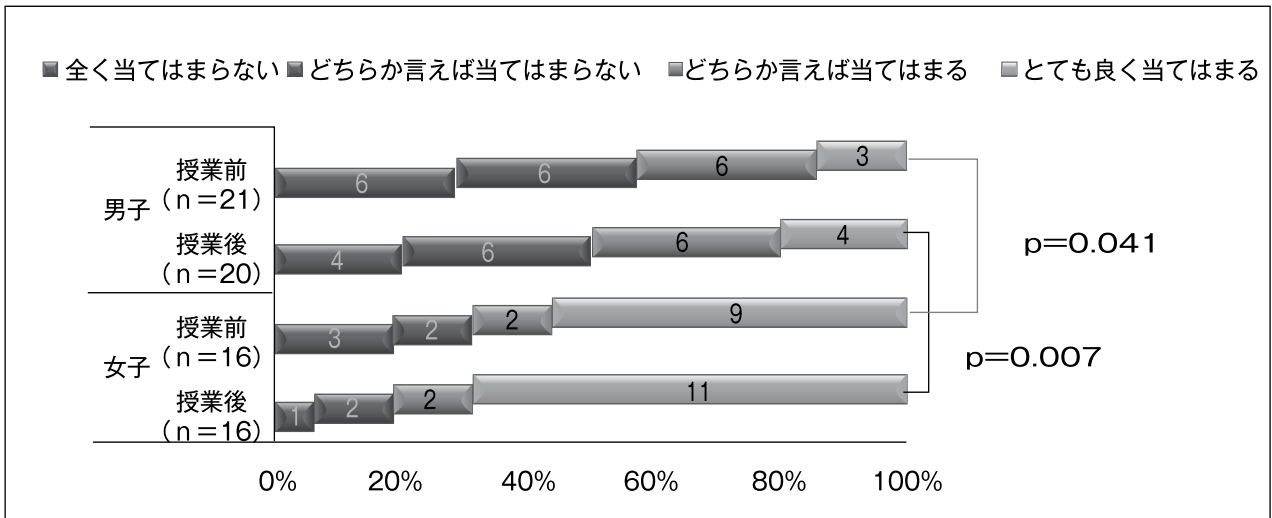


図4 「不満があると聞いてくれる人がいる」

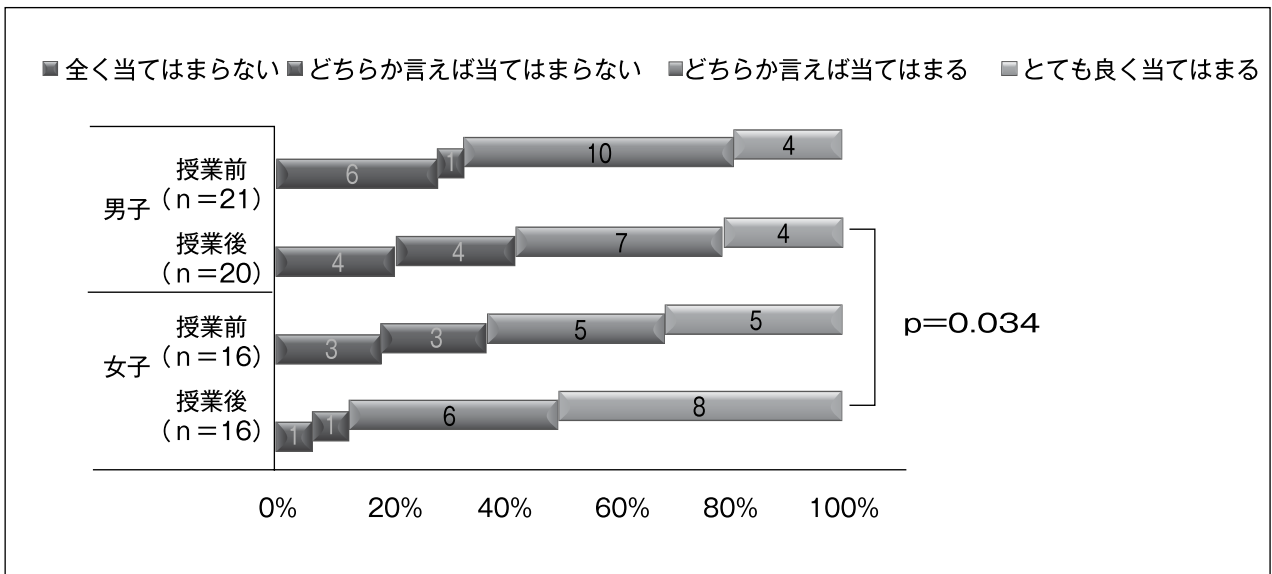


図5 「元気がないと気づいてくれる人がいる」

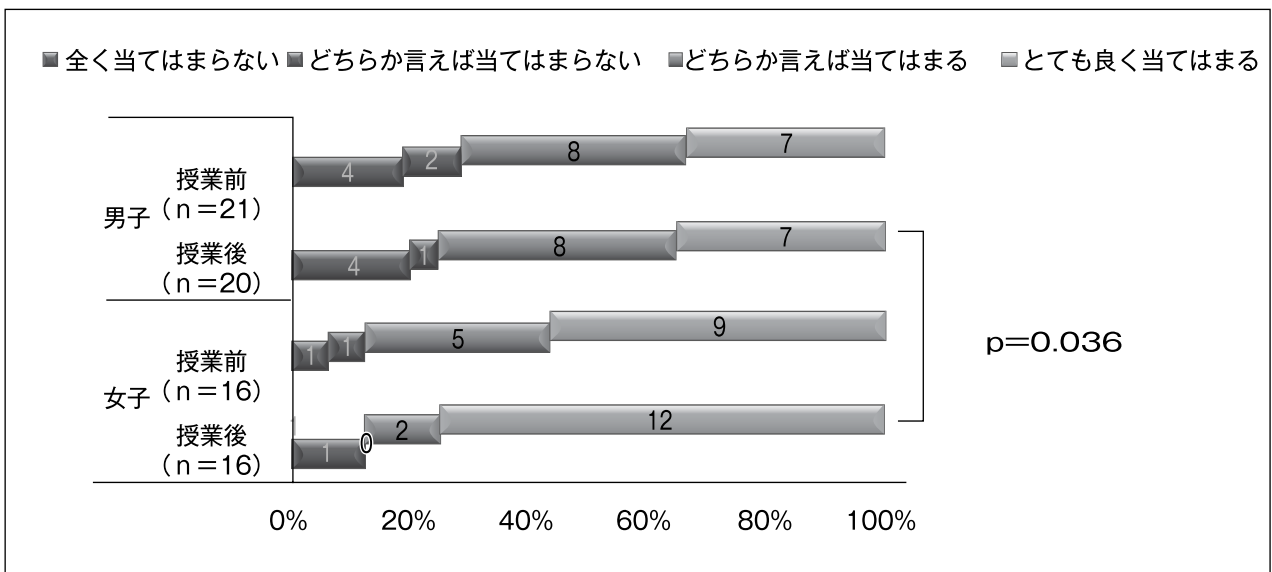


図6 「私の存在を認めてくれる人がいる」

図5は、授業前後の「元気がないと気づいてくれる人がいる」の項目における男女の選択数を示したものである。授業後「とてもよく当てはまる」とするものが男子4名(20.0%)、女子8名(50.0%)で、女子は男子に比べ有意に「元気がないと気づいてくれる人がいる」とする割合が高かった(p=0.034)。

図6は、授業前後の「私の存在を認めてくれる人がいる」の項目における男女の選択数を示したものである。授業後「とてもよく当てはまる」とするものが男子7名(35.0%)、女子12名(75.0%)で、女子は男子に比べ有意に「私の存在を認めてくれる人がいる」とする割合が高かった(p=0.036)。

以上のことから、授業前から「違う性別の方が幸せだ」「不満があると聞いてくれる人がいる」という2項目に性差が見られ、授業後「この性別に生まれて良かった」、「違う性別の方が幸せだ」、「将来赤ちゃんが欲しい」、「不満があると聞いてくれる人がいる」、「元気がないと気づいてくれる人がいる」、「私の存在を認めてくれる人がいる」の6項目へと性差のある項目数が拡大したことがわかる。また、男子は女子に比べ有意に「この性別に生まれて良かった」とする割合が高く、「違う性別の方が幸せだ」に否定的である割合が有意に高かった。女子は男子に比べ有意に、「将来赤ちゃんが欲しい」、「不満があると聞いてくれる人がいる」、「元気がないと気づいてくれる人がいる」、「私の存在を認めてくれる人がいる」と認識した割合が高いという特徴が見られた。

## 2. 授業前の興味関心に関する自由記述から

表1 授業前の興味関心(男子; n=21, コード23)

サブカテゴリ<8>	カテゴリ<4>
虫さされ	虫さされの状態
DSなどの携帯ゲーム(4)	遊び;ゲーム(4)
将棋	日常関心;将棋
野球(12)	運動系(17)
サッカー(2)	
バスケット	
体育全般	
水泳	

表2 授業前の興味関心(女子; n=16, コード「17」)

サブカテゴリ<13>	カテゴリ<10>
テレビを見ながらごろごろする	日常の好み;テレビを見てごろごろする
おなか痛いことがあるので生理がわからない	腹部の痛みと月経の症状の鑑別の難しさ
あくびはなぜ出るのか?	あくびの原因に関する疑問
読書	趣味;読書
DSなどの携帯ゲーム(2)	遊び;DS,ゲーム(2)
料理	日常関心;料理
音楽	趣味;音楽
おしゃれ	日常関心;おしゃれ
裁縫(3)	日常関心;裁縫(3)
バレーボール(2)	運動系(5)
バスケット	
バトミントン	
テニス	

表1は、男子の授業前の興味・関心についての自由記述をまとめたものである。23コード、8サブカテゴリ、4カテゴリにまとめられ、主に《遊び(ゲームや将棋)》《運動系(野球やサッカーなど)》について記述されていた。

表2は、女子の授業前の興味・関心についての自由記述をまとめたものである。17コード、13サブカテゴリ、10カテゴリにまとめられ、主に《運動系(バレーボールやバスケット)》《裁縫》《遊び(ゲーム)》について記述されていた。

3. 授業後の感想などの自由記述から

表3 授業後の男子の感想等 (n=21, コード19)

サブカテゴリ (12)	カテゴリ (10)
赤ちゃんのいろいろなことを知った(3)	赤ちゃんの色々なこと(成長や抱き方など)がわかった(6)
赤ちゃんの成長についてわかった(2)	
赤ちゃんの抱き方がわかった	
知らなかったことをいろいろ知った(4)	知らなかったことを知った(4)
妊娠と月経について知った	妊娠と月経について知った
妊婦さんの不自由さを疑似体験した	妊婦さんの不自由さを実感
経験できて良かった(2)	経験できて良かった(2)
楽しかった	楽しかった
おもしろかった	おもしろかった
授業をしてくれて良かった	授業をしてくれて良かった
難しい	難しい
色々教えてもらって大変	多い内容で大変

表4 授業後の女子の感想等 (n=16, コード27)

サブカテゴリ (19)	カテゴリ (11)
赤ちゃんについて知った	赤ちゃんの色々なことがわかった (5)
赤ちゃんの色々なことがわかった (3)	
赤ちゃんの成長がわかった	
重さを実感し驚く (2)	赤ちゃん人形を抱いて重さを実感した (5)
赤ちゃんの重さを実感した (2)	
痛覚から重さを実感	
赤ちゃんの抱き方がわかった (2)	赤ちゃんの抱き方などがわかった (3)
抱き方を自慢したい	
知らなかったことを知った (3)	知らなかったことを知った (4)
身体のことを知った	
おもしろい (2)	授業がおもしろい (3)
妊婦体験おもしろい	
楽しい	授業が楽しい
神話が興味深い	神話を知り、興味を抱く (2)
神話を知り驚く	
命のバトンを自覚した	命のバトンを自覚
妊婦体験をしてみたい	妊婦体験の希望
将来、子どもが3人欲しい	将来希望する育児数の表示
助産師志望	将来の職業取得に関する意欲

表3は、男子の授業の感想等を自由記述したものをまとめたものである。19コード、12サブカテゴリ、10カテゴリにまとめられ、特に、赤ちゃんに関する記述が多く、「赤ちゃんの成長過程」、「赤ちゃんの抱き方」、「疑似体験の経験」について述べられていた。

表4は、女子の授業の感想等を自由記述したものをまとめたものである。27コード、19サブカテゴリ、11カテゴリにまとめられ、やはり赤ちゃんに関する記述が多く、「赤ちゃんの成長過程」、「赤ちゃんの重さの実感」、「赤ちゃんの抱き方」について述べられていた。



## IV. 考察

### 1. 児童観を踏まえた授業展開

本研究の目的は、授業のかかわりの中で児童が日々どのようなニーズをもち、今回の授業からどのような影響を受け、変化した部分があったのか知った上で、今後の授業に向けて児童観を深め、効果的な授業ができるようにクラスのカラーや考え方がどのような傾向にあったのかという特徴を把握することであった。

授業前の女子児童の興味関心事は、運動系 (5) 裁縫 (3) ゲーム (2)、男子児童の興味関心事は運動系 (17) ゲーム (3) 将棋 (1) であり、女子は料理や裁縫、おしゃれに代表される女性的な日常について、男子は野球などのクラブ活動に代表されるスポーツなどに興味関心を示していた。日常の興味関心のあるものの中で女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく過ごしている日常が見えた。土肥<sup>6)</sup>は、社会的カテゴリの1つとして、ラベルづけの際に子どもが参考にするのが、あらゆるところに存在する男性的・女性的というジェンダーで、仕事の役割や身体的外見と自己の認知発達という個体内の要因によってもジェンダー・スキーマを形成していくと述べている。また、石沢ら<sup>7)</sup>は、「家庭での性教育の担い手は母親が55%を占め、両親の分担は28%、父親は3%」と述べており、偏りのある家庭教育の役割分担の中で育った家庭基盤と学校生活における役割から判断し答えたものと述べている。つまり、本対象が所属しているクラスにおいても、日常生活の中で確かに女らしさ、男らしさを形成していることがわかった。このことは、命の授業を行う際の説明内容や発問方法に影響することが推測できる。よって、事前にこのようなクラスのカラーを捉え、児童観を踏まえて、児童に沿った授業展開をすることが必要と考えられる。

次に、男子児童の授業の感想を見ると、《赤ちゃんのことが色々わかった》《赤ちゃんの重さを実感した》《赤ちゃんの抱き方がわかった》《知らなかったことを知った》《経験できて良かった》などのカテゴリが抽出され、今回の研究者が行った授業で対象は赤ちゃんの存在について五感を通して認識し、赤ちゃんという存在を妊娠の経過に伴う胎児の成長・発達から概要をつかみ、大きさや重さを実感し体験知となっていた。また、疑似体験は将来の妊娠や出産をイメージすることに繋がり、また、妊婦の動きにくさを体験したことで相手をいたわる気持ちが引き出せた。知らなかったことを知る喜びと体験する中で培った体験知は、驚きやおもしろさ、楽しさという形で認識されていた。しかし、この気づきは長続きしないことが推測できる。よって、小中学校の児童や生徒が定期的に命に関して考える機会を持つようなプログラムの構築が必要であると考えられる。

### 2. 命の授業実施における影響

男子は女子に比べ「この性別に生まれて良かった」とする割合が有意に高く、自己の性別に関して肯定的であるという特徴が見られた。一方、女子は男子に比べ有意に「違う性別 (男子)の方が幸せだ」、「将来赤ちゃんが欲しい」、「不満があると聞いてくれる人がいる」、「元気がないと気づいてくれる人がいる」、「私の存在を認めてくれる人がいる」と認識した割合が高いことから、授業後に母性意識の目覚めや周囲のサポートしてくれている存在を認識し、さらに、周囲で尊重してくれる存在について気づくという特徴が見られた。

また、今回の命の授業から、対象は自己の存在の経過を振り返り、自分自身がかけがえのない大切な存在であると感じとった。さらに、自分より幼い赤ちゃんという存在について、妊娠の経過に伴う胎児の成長・発達を胎児人形の大きさや重さから実感し、命のバトンを繋ぐ一員であることを認識したと思われる。また、性差を2項目から6項目へと広げたことは、この授業で自己を振り返り、周囲を見つめ直す機会となったことにより、自己や他者への認識を深めたことによる広がりであると考えられた。授業を行う者は、これらのことを認識し、授業展開する必要があると思われた。

## V. 結論

### 1. 命の授業は、男女差に関わる特徴を踏まえ、児童の興味・関心に沿う授業内容を工夫する必要がある

ある。

2. 本研究において、理科の授業の中で、男子は女子に比べ有意に自己の性別に関して肯定的であるという特徴が見られた。また、本研究における命の授業を通して、女子は赤ちゃんを産みたいという母性意識の目覚めや周囲のサポートについて認識し、さらに、尊重してくれる存在に気づくという特徴が見られ、性別によって自己の性に関する認識の違いが明確になっていくことが示唆された。

なお、本稿の一部概要は、北海道成育看護研究会（2009年8月）において報告した。

## 引用文献

- 1) 安河内静子, 樋口善之, 石村美由紀, 三根有紀子, 浅野美智留, 鳥越郁代, 古田裕子, 松浦賢長: 田川市郡の学校における性教育の実態調査: 小・中・高校へのアンケート調査から, 福岡県立大学看護学部紀要 2 巻 2 号, 68-78, 2005.3
- 2) 土肥 伊津古都子, 菅 俊夫: 心理的両性具有性研究に関する一考察, The Japan Society of Educational Sociology 日本教育社会学会大会発表要旨集録 (47) 53-54 1995.9
- 3) 土肥 伊都子: 飲酒の勘定額にみるジェンダー・ステレオタイプ-女性性・男性性との関連-, 神戸松蔭女子学院大学紀要, Vol.6 (1), 63, 2004.3
- 4) Lippa, R.A.: Introduction to social psychology. Belmont: Wadsworth. 1990
- 5) 土肥 伊都子: ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成, 教育心理学研究 Vol.44 (2), 62-69, 1996
- 6) 土肥 伊都子: ジェンダーに関する役割評価・自己概念とジェンダー・スキーマ-母性・父性との因果分析を加えて-, 社会心理学研究, 11 (2), 84-93, 1995
- 7) 石沢敦子, 矢島まさえ, 佐光恵子, 小林亜由美, 梅林奎子: 思春期における子どもの性教育のあり方 (その1) 中学校3年生の過程における性教育の現状と課題, 群馬パース学園短期大学紀要, Vol.6 (1), 3-11, 2004.3

## 参考文献

- 1) 濱田維子, 小林益江, 佐藤珠美, 江島仁子: 看護大学生ピアエデュケーターによる小学生への性教育活動の試み-年齢差のある対象へのピアアプローチとその評価-, 日本赤十字九州国際看護大学 Intramural Research Report 5 号, 10-16, 2006.12
- 2) 石沢敦子, 中垣紀子: 性教育における看護職の役割, 小・中学生とその保護者の意識調査から, 群馬医学80号, 127-133, 2004.10
- 3) 石沢敦子, 矢島まさえ, 佐光恵子, 梅林奎子: 思春期における子どもの性教育のあり方 (その2) 性教育における看護職の役割, 群馬パース学園短期大学紀要, Vol.6 (1), 13-20, 2004.3
- 4) 佐藤順子, 森和彦: BemとGilliganの研究から見る「女性の視点」による心理学研究への影響, 秋田大学教育学部研究紀要教育科学部門, 4 9, 87-98, 1996
- 5) 多々納道子, 若林真由美: 小学生のジェンダー形成, 鳥根大学生涯学習教育研究センター, 23-34, 2006.3
- 6) 土肥伊都子, 広沢俊宗, 田中国夫: 多重な役割従事に関する研究-役割従事タイプ, 達成感と男性性, 女性性の効果-社会心理学研究 Vol.5 (2), 137-145, 1990
- 7) 土肥伊都子, 廣川空美, 水澤慶緒里: 共同性-作動性尺度の構成概念妥当性の検討, 神戸松蔭女子学院大学研究紀要, 1-16, 2007.3
- 8) 土肥伊都子: ジェンダー・パーソナリティが心理的ディストレスに及ぼす影響-多重役割としてのリーダー経験に注目して-, 神戸松蔭女子学院大学研究紀要, 1-17, 2008.3
- 9) 土肥伊都子, 廣川空美, 水澤慶緒里: 共同性・作動性尺度による男性性・女性性の規定モデルの検討-ジェンダー・アイデンティティ尺度の改訂と診断比によるスキーマ測定, 立教大学心理学研究, Vol.51, 103-113, 2009.3

